

ドイツ語学習データベース構築の試み⁽¹⁾

阿部一哉

0. はじめに

本稿は、ドイツ語を使用して遂行できる行為の記述 Kannbeschreibungen を軸にした、ドイツ語学習データベース構築について論じるものである。

Kannbeschreibungen (以下KB) は、「自己紹介をすることができる」「人に頼み事をするすることができる」「依頼を受ける(あるいは拒絶する)ことができる」、などのように、極めて具体的な形で、言語使用による行為の遂行能力を記述したものである。ドイツ語学習の目的として、ドイツ語運用能力の習得を掲げるならば、KBには、大きくふたつの意義を認めることが可能であろう。そのひとつは、ドイツ語学習の到達度を評価するための基準という意義、もうひとつは、ドイツ語学習の動機付けという意義である。

KBは、ドイツ語についての用語であるが、より一般的にはCan-Do Statements (以下CDS) と呼ばれ、現在英語・日本語教授法の分野での導入が始まっている(長沼2009、来嶋 et al. 2012など)。

英語検定試験のホームページでも、「英検Can-doリスト」が公開されている⁽²⁾。この英検のホームページでは、CDSの利用法として「英検受験のための目安として」、「技能別診断リスト」として、「企業での人事、大学・高校などの資格優遇のための参考資料として」、「研究のテーマとして」の4つを挙げている。英語学習における位置づけとしては到達度評価、動機付け両方の可能性を認めると言える。

本稿では、まずドイツ語学習における動機付けという観点から、KBの活用方法を探ってみたい。到達度評価といった観点での活用法を初めから前面に押し出すと、場合によっては学習者を縛るだけの存在になってしまいかねないと、考えられるからである⁽³⁾。

そもそもドイツ語学習者は、ドイツ語を使ってどのようなことをしたいと考えているのだろうか。また、ドイツ語の学習を通してどのようなことができるようになったと自覚しているのだろうか。そしてこのことをドイツ語学習の動機付けとどのように効果的に関連付けて行くことができるのだろうか。

本章では、まずこのような観点に従って、実際のドイツ語授業において行ったふたつの調査について論じる。そして次に、これらの調査の結果を踏まえて、本稿の目的について述べる。

0.1 ドイツ語を使って何がしたいのか～授業におけるニーズ調査～

外国語の授業において、受講者のニーズを知ることは、具体的な授業計画を練り上げるために、とりわけ重要である⁽⁴⁾。

2013年度、筆者の担当するドイツ語入門レベルの授業において、ひと通りガイダンスを行ったあとで、「ドイツ語を使って何がしたいのか」を箇条書きで書き出してもらった。その結果、「ドイツ語で書かれた書籍を読みたい」などのように、従来からある「文法訳読法」の授業が想定しているようなニーズだけではなく、「ドイツ留学」「書きたいことを書けるようになりたい」「仕事で使いたい」など非常にバラエティ豊かなニーズがあることが確認できた（【巻末資料1】）。

授業計画の一環で行った調査であったが、得られた多種多様なニーズには、2セメスターをひと区切りとした当該ドイツ語授業だけでは、とても対応しきれないことは明白であった。結局2013年度の授業においては、「ドイツ語の歌を歌詞を見ながら聴いてみる」「Web上のドイツ語で書かれたお菓子のレシピを読んでみる」といった、多数のニーズの中から授業で手軽に扱いうるトピックだけをピックアップして、特定のコンテンツを紹介するにとどまった。しかし、本来こういった根本的な学習理由は授業の内外に関わらず、学習者本人が保持して、動機付けとして活用していくべきものであろう。

0.2 ドイツ語を使って何ができるようになったのか～学習内容のふりかえり～

ニーズ調査を行った受講者たちのクラスでは、年度末に「ドイツ語を使って何ができるようになったのか」を箇条書きで書き出してもらった。これは、受講者自身に、授業における学習内容のふりかえりを促す目的で実施したもので、「自分の名前が言える」、「人の家族構成が尋ねられる」、「ドイツ語でレシピが読める」、「ビデオでドイツ語がところどころ聞き取れる」のように、授業で取り上げた表現法やトピックを受講者自身で取り上げて、習熟度の自己評価を行ってもらったものである（【巻末資料2】）。

実際の回答は、記述方法にばらつきが認められたが、以下に挙げる、KBの形式で整形を施した。

■ 話す

「言う・尋ねる」

- ・ {自分の／人の} 名前が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 出身が {言える／尋ねられる} …

なお、得られた個々の項目は、もちろん全ての受講者が完璧に習得した能力を表しているわけではない。というのも、それぞれの受講者が自由に項目を想定し、習熟度についての自信の度合いを5段階で自己評価して併記してもらったので、完全に習熟しているわけではない項目も含まれているのである。

得られたKBは、学習年度の更新や、ドイツ語授業の担当教員が交代があっても、学習者自身が保持して、新たなKBを設定したり、すでにあるKBに対する自信の度合いを変更したりしていくべきものであろう。ドイツ語学習の新たに動機づけにつながることを期待される。

以上、筆者が担当するドイツ語授業における2つの調査について述べた。授業開始時の調査から、学習者のニーズが多岐に渡っているため、授業外学習での活用の可能性も探る必要性があることを確認した。他方、授業終了時におけるふりかえりでは、KBの形で個々の学習者のドイツ語習熟度を、学習者自身が確認できることについて述べた。また、得られたKBは学習者自身が授業から独立して保持し、ドイツ語学習の動機づけを行うため、継続的に更新していく必要性があることについて述べた。

0.3 本稿の目的

ドイツ語学習における、授業外学習の重要性は強調してもしきれない。上で見たニーズ調査、学習内容調査においても、調査結果の授業外学習における利用について触れた。

しかし、仮にドイツ語を使って何をしたいのか（すなわちニーズ）、何ができるようになったのか・できるようになりたいのか（すなわちKB）を認識していても、それらが具体的な課題や教材、言語資料と関連付けられていなければ、学習者は何を学習していいかが分からない。

このような問題を解決するためには、大学のドイツ語教育の枠組みであるならば、ドイツ語教育者やドイツ語学習の熟達者が、ニーズ・KBと広く言語資料の関連付けを行うことが可能である。その方法として、ひとつには授業における指導が挙げられ、またひとつには授業外でのe-learningシステムのような、オンラインシステムによるサービス提供が想定できる。

そこで本稿では、後者のオンラインシステムの観点から、ドイツ語学習者の授業外学習を支援するためのシステムの構築を検討する。その際、特に具体性の高いKBを軸にした、ドイツ語学習データベースを想定して論を進めたいと思う。

第1章では、ドイツ語学習データベースの先行的事例として、ドイツ語のKB研究の重要な成果であるProfile DeutschにおけるKBを取り上げ、その概観を示す。第2章では第1章の内容を踏まえ、プログラミング言語python、NoSQLサーバー MongoDBを利用した、データベースの実装について述べる。

1. Profile Deutsch

本章では、ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Language、以下CEFRとする）のレベル分けで要求されている行為遂行能力を、ドイツ語について、具体的な事例を付して記述したProfile deutschを取り上げる⁽⁵⁾。

まず1.1節でCEFRについて概観を示す。続く1.2節では、Profile DeutschにおけるKannbeschreibungen（KB）を見る。続く1.3節では、Profile Deutschの全体像について概観を示す。そして1.4節ではProfile Deutschを批判的に評価し、本稿で検討するドイツ語学習データベース構築に関わる要件をまとめる。

1.1 CEFR—ヨーロッパ言語共通参照枠

CEFRとは、欧州評議会が、ヨーロッパで言語を学ぶ人の到達レベルを示す指標としてまとめたものである。CEFRの特徴は、行動中心主義的に言語使用を捉える点である。「あらゆる言語使用と学習の形」（吉島・大橋2004：9）として、次のようにまとめられている。

言語の使用というとき、言語学習をも包括して考える。これは人によって遂行される行為の一部である。人は個人としてまた社会的存在として一連の能力（competences）を持っているが、それには一般的能力（general competences）と、特別なものとして、コミュニケーション言語能力（communicative language competences）の二者がある。そして、各自が利用できる能力を使いながら、さまざまなコンテキストで、さまざまな条件（conditions）下で、さまざまな制約（constraints）の下に言語活動（language activities）に携わる。その際テキスト（texts）を産出するか、あるいは受容するという言語処理（language processes）に携わることになる。そこで作られるテキストは特定の生活領域（domains）に属するテーマ（themes）と関連する。またその際課題（tasks）の成就を目指して最も有効と思える方略（strategies）を使う。こうした行為を当事者自らが観察・モニターする中で、上述の能力はそれぞれ強化されたり、修正されたりするのである。

このような枠組みの中で、具体的な能力記述を行うのが、CDS（ドイツ語ではKB）である。

1.2 Kannbeschreibungen（KB）

ここでは、Profile Deutschにおける、レベル別言語運用能力記述であるKBに

ついて見る。KBはCEFRのA1からC2までのレベル分けに従って、「包括的KB」「事例つきの詳細なKB」が、まとめられている。例えば「口頭によるやり取り」「口頭表現の受容」では、次のようなKBがまとめられている（Profile Deutsch: 108ff. から一部を抜粋した。訳は筆者）。

包括的KB：口頭によるやり取り

話し相手がゆっくりと明瞭に、標準語を使って話し、必要に応じてゆっくりと繰り返したり言い換えを行ってくれて、常に話すのを手助けをしてくれるならば、簡単な方法でコミュニケーションを行うことができる。

事例つきの詳細なKB：口頭によるやり取り

・自分自身や他者について紹介すること、あるいは他者が紹介された時に対応することができる。

部署の公の期日について約束をとりつけることができる

大まかなKB：口頭表現の受容

ゆっくり明瞭に話してもらえば、自分自身や家族、直接身の回りにあるものに関するもので、よく知っている単語やごく簡単な構造を理解することができる。

事例つきの詳細なKB：口頭表現の受容

・話し言葉テキストにおいて頻繁に使用される定形表現（例えば出会いや別れのあいさつ、あるいは謝罪など）を理解することができる。

テレビ放送のオープニングでの視聴者に対する挨拶を理解することができる

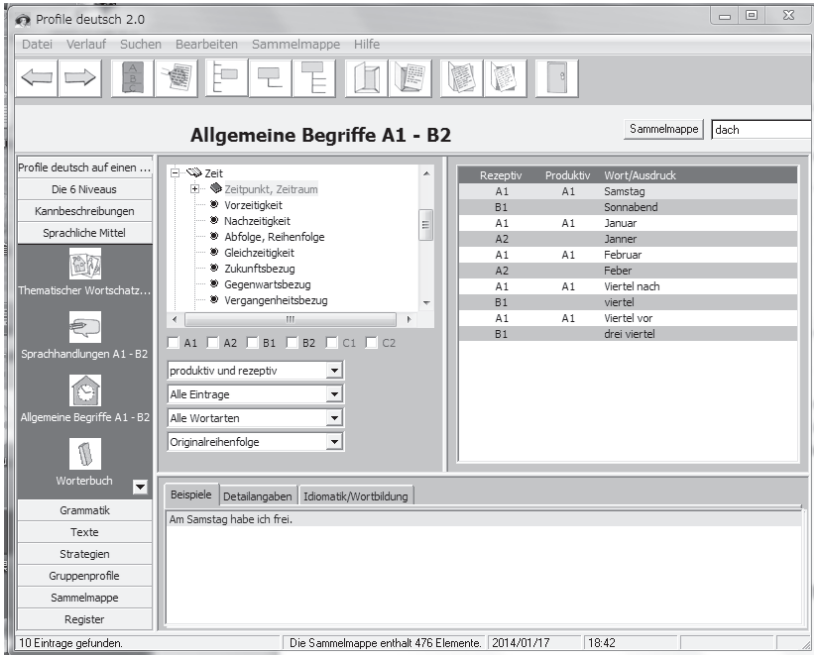
これを見ると極めて詳細な記述であることが分かる。量も決して少なくはなく、入門レベルのA1では40の包括的KBが認められる。これに事例つきの詳細なKBが付随してくるので、A1レベルでも100位上のKBを管理し続けなければいけない計算になる。自律的なドイツ語学習者が飽きずにKBを管理し続けるためには、何らかの仕組みを用意する必要があるだろう。

1.3 Profile Deutschの全体像

Profile Deutschは、一冊の本とCD-ROMからなっている。

本の方は、CEFRのドイツ語での実装をまとめたものである。前節で取り上げたKBは、この本において記述されている。他に、Profile Deutschの枠組みの中で取り扱う発話行為、テーマ別語彙集の分類項目、シナリオ、言語機能、文法項目、一般概念、ストラテジーなどがリストアップされている。

CD-ROMには、PCにインストールして使用するデータベースプログラムが収録されている。このデータベースには、膨大な言語資料が、本のほうでまとめら



れている諸項目に従って分類されている。

上図は「一般概念 > 時間 > 時点・時間的広がり」を選択した結果である。画面中央右部に、具体的な語が、A2、A1と言ったラベル付きで表示されている。例えば、Samstag「土曜日」は言語表現生成においても受容においてもA1レベルの語としてラベル付けされているが、同じ「土曜日」の地域的変種であるSonnabendは言語表現受容においてB1レベルの語で、言語表現生成においてはB2以下では修得する必要がない語としてラベル付けされている。

Profile Deutschの実体は、従ってCD-ROMの方である。そこではKBや発話行為、テーマ別語彙集、シナリオ、言語機能、文法項目、一般概念、ストラテジーと言った個々のデータ集が、膨大な言語資料を介して細密に結びつけられている。この一連のデータ群を使用することで、Profile Deutsch、すなわちCEFRの枠組みに準拠したカリキュラム設計や、教科書執筆を、効果的に行うことができるだろう。

1.4 Profile Deutschと「ドイツ語学習データベース」

前節では、Profile Deutschの実体が、ドイツ語学習・ドイツ語使用に関わる個々のデータ集が言語資料によって細密に結び付けられた一大データベースであることを、確認した。

Profile Deutschが、ドイツ語教育・ドイツ語学習にとって非常に有用なツ

ルであることは疑いようもない。しかし、本稿で想定しているようなドイツ語学習支援ツールとしての使用を想定した場合、いくつかの不十分な点がある。

Profile Deutschが不十分である点の一つ目は、個々の学習者とデータベースが結びついていない、ということである。Profile Deutschは、一般ユーザーによる更新が不可能なデータベースであるため、個々の学習者が現時点でどのような項目をピックアップして学習するのかを管理する機能が無い。もちろん、個々の学習者が自習ノートなどを使って、自身の学習内容を管理することは可能であるが、教師が介在するe-learningシステムを想定するならば、ユーザーデータベースも統合した形で、システム構築を行う必要がある。

Profile Deutschが不十分である点の二つ目は、非常に緻密に設計されているため、拡張には手間がかかるということである。一点目の問題点とも関連するが、Profile Deutschは、一般ユーザーによる更新が不可能なデータベースである。従って、新たに教科書分析などを行って練習問題や、会話テキストをデータベースに追加することが難しい。とりわけ、Profile Deutschに収録されている言語資料は、練習問題に類するものではなく、モデル的な言語表現のみである。また、仮にデータの追加が可能になったとしても、個々の言語表現単位が、細かい定義済み分類項目に従ってラベル付けされているため、新しいデータの追加に比較的高い労力が要求される。このことは、システムの開発段階においては非常に不利に働く。

Profile Deutschが不十分である点の三つ目は、枠組みがしっかりしているがために、結果的に学習者に学習内容を強制することになる危険性をはらんでいるということである。筆者が行った授業アンケートは自由記述であったために、学生に要求する労力が比較的少なく済んだ。しかし、例えば上で見たように、Profile DeutschのKBはA1レベルでも100近くあり、この能力記述に従って到達度を自己評価することは、かなり大変である。また、言語資料が細かく能力別に分類されているため、学習内容はともすると「学習したい内容」ではなく「学習しなければいけない内容」になってしまう。授業では、「学習しなければいけない内容」が提供されているので、自律的学習用コンテンツはまずは「学習したい内容」といったゆるいものである必要があると、筆者には思われる。

以上、Profile Deutschが不十分であると考えられる点を3つ挙げた。この問題点を踏まえて、「ドイツ語学習データベース」構築の要件として、以下3点挙げる。

- (1) ユーザーデータベースと他のデータベースを関連付けること。
- (2) ドイツ語学習に関わる個々のデータ集を、相互に自律的なものとして設計すること。
- (3) ドイツ語学習に関わる個々のデータ集が、「タグ」によってゆるやかに結合していること。

(3) については補足が必要であろう。タグというのは、要素の分類項目にあたるが、大きな特徴は予め定義されていないという点である。要素を見た時に、即座に思いつくキーワードなどをタグとして設定する。

例えば、「自己紹介をすることができる」といったKBであれば「自己紹介」「話す」などのタグが想定できるだろう。翻って、Mein Vorname ist Kazuya。「私の下の名前はカズヤです。」といった例文ならば「自己紹介」「話す」「名前を言う」「下の名前」「ファーストネーム」「コピュラ文」などのタグを想定することが可能だろう。ここで挙げたKBと例文について見た場合、「自己紹介」「話す」といったタグで、これらの要素が関連付けられることになる。

この極めてゆるい、放任主義的な分類手法は、情報コミュニケーション技術(以下ICT)の分野では、フォークソノミーと呼ばれ、WikipediaなどのWebサービスにおいて一定の成果を上げている⁽⁶⁾。関連付けたい要素同士が必ずリンクされるとは限らないが、一般的な用語を使ってタグ付けすることで、蓋然的にリンクが成立することを、期待する手法と言える。デメリットはリンク付けの不確実性であることは言うまでもないが、複数のデータ作成者が要素のリンク付けに甚大な配慮を行うことなく、高い開発効率を維持できるという大きなメリットがある。

以上、本章では、CEFRによるCDS = KBのドイツ語における実装版であるProfile Deutschについて概観を示した上で、我々が想定するドイツ語学習データベース構築に関わる要件を3点挙げた。次章では、試行的に行っているシステム開発の概要についてまとめる。

2. データベースの実装

現在、「教科書データベース」「事例レポジトリ」「CDSデータベース」の設計が終了している。以下2.1節で個別に取り上げる。なお、データベース操作は、軽量プログラム言語のひとつとして分類されるPython、データベース管理システムはMongoDBを利用する^{(7), (8)}。

2.1 設計済みのデータベース

2.1.1 教科書データベース

教科書データベースは、日本語で書かれた既存の教科書を、目次情報を使って分類するデータベースである(阿部2013)。例えば以下のような検索が可能になる。

検索文字列：完了

目次項目	教科書ID	ページ番号
現在 <u>完了</u> 形	<u>001</u>	82, 83, 84, 85, 86, 87
現在 <u>完了</u> 形	<u>002</u>	61, 62, 63, 64
現在 <u>完了</u> 形	<u>003</u>	82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89
現在 <u>完了</u> 形の基本構文	<u>004</u>	80, 81, 82, 83, 84, 85

「完了」という文字列 (囲み) を使って検索を行うと、教科書001～004 (下線) の各ページ番号が返される。このページ番号の一覧によって、素早く探したい概念が記述されている箇所にとどり着くことが可能になる。

2.1.2 事例レポジトリ

事例レポジトリは、ドイツ語と日本語の対訳事例をデータベース化したものである。以下の例を使って、事例データのデータ構造を見てみたい⁽⁹⁾。

日本語文データ： これはテストです。
ドイツ語文データ： Das ist ein Test.
日本語キーワード： "これ"、"は"、"テスト"、"です"、"。"
ドイツ語キーワード： "die"、"sein"、"eine"、"Test"、"!"
タグ： "叙述文"、"sein"

日本語・ドイツ語文データは、検索結果として表示される事例データである。日本語・ドイツ語キーワードは検索の際に利用される。タグは1.4節で述べたように、データ集同士の「ゆるい結合」を実装するためのデータである。

データベースを操作する機能としては、文データの生成 (Create)、読み出し (Read)、更新 (Update)、削除 (Delete) のいわゆるCRUD機能と、日本語・ドイツ語単語の組み合わせによる検索、タグによる検索という2つの検索機能を実装している。阿部 (2011) で構築作業について述べた、日独対訳例文集の拡張版と位置づけられる。

2.1.3 CDSデータベース

CDSデータベースは、ドイツ語能力記述文KBを管理するためのデータベースである。ドイツ語個別的なKBではなく、より一般的なCDSをデータベースの名称として採用している。以下の例を使って、CDSデータの構造を見てみたい。

CDS： 自己紹介をする
キーワード： "自己"、"紹介"、"を"、"する"

タグ： "自己紹介"、"話す"

CDSが能力記述文（Profile DeutschにおけるKB）、キーワードはCDS検索用のデータである。事例レポジトリとCDSでのCRUD操作機能、CDS及びキーワード、あるいはタグによる検索機能を実装している。

以上、設計済みのデータベースについて述べた⁽¹⁰⁾。

2.2 今後のロードマップ

1.4 節でまとめた要件に関して、ユーザーデータベースが未実装である。これについては、2014年度の運用開始を視野に入れて、急ピッチで開発を進める予定である。

また、「教科書データベース」「事例レポジトリ」「CDSデータベース」「ユーザーデータベース」を実際に使用するためには、Web上で、統合サービス提供システムを公開する必要がある。こちらをあわせて2014年度の運用開始を視野に入れて開発を進める。

さらに、教科書データベースから、練習問題を抽出し、公開可能な形に整形を行う必要がある。これについては、2014年度の授業実施と並行しながら、編集作業を進めていく予定である。

3. おわりに

以上、CDS = KB による、言語運用能力記述を軸に据えた、ドイツ語学習データベースの構築について述べた。ドイツ語学習にせよ、他の学問にせよ、実生活における問題解決に関わらないような知識は、知識のための知識でしかない。ドイツ語学習データベース開発理念の根底には、個々の学習者によるドイツ語学習を、なるべく早い時期に大学での授業から切り離して、自律的な活動としての確立を促すという狙いがある。ICTに支えられた、いつでもどこでもサービスを提供できる環境が、このような理想を実現することを可能にしたと言える。

参考文献

- 阿部（2011）：阿部一哉著．日独パラレルコーパスを利用した用例集の作成．跡見学園女子大学文学部紀要 46, A 77-92, 2011-03-15 跡見学園女子大学．
- 来嶋 et al. (2012)：来嶋 洋美、柴原 智代、八田 直美著．JF日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発．国際交流基金日本語教育紀要（8）, 103-117, 2012-03． 独立行政法人国際交流基金．
- 長沼（2009）：長沼君主著．Can-Do 評価--学習タスクに基づくモジュール型シラバス構築の試み．東京外国語大学論集（79）, 87-106, 2009． 東京外国語大学．

吉島・大橋 (2004) : 吉島茂、大橋理枝訳・編. 外国語教育II. 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ参照枠. 朝日出版社. 原著 : John Trim, Brian North, Daniel Coste. Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment. 3rd Printing 2002. Cambridge University Press.

Profile Deutsch: Manuela Glaboniat, Martin Müller, Paul Rusch, Helen Schmitz, Lukas Wertenschlag. Profile deutsch :gemeinsamer europäischer Referenzrahmen : Lernzielbestimmungen, Kannbeschreibungen, kommunikative Mittel : Niveau A1-A2, B1-B2, C1-C2. Berlin: Langenscheidt, 2005.

Richards & Rodgers (2001): Richards, Jack. C., & Rodgers, Theodore. S. Approaches and methods in language teaching (2nd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.

Vanderwal (2014): Vanderwal, Thomas. "Off the Top: Folksonomy Entries." 2014年1月25日取得. <http://www.vanderwal.net/random/category.php?cat=153>

注

- (1) 本稿は平成24年度跡見学園女子大学特別研究助成費（課題名「跡見メソッドの確立を目指して～ドイツ語教授法・学習法についての基礎研究～」）により遂行された基礎研究の成果である。
- (2) <http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/cando/>
- (3) 慶応義塾大学境一三氏のFB上での発言に大いに共感する。「強調することは、「できるようになったことを確認して、思いっきり喜ぶんだよ」ということ。できないことは、言わなくても彼らは気にするから。」(2013年10月11日)
- (4) 例えばRichards & Rodgers (2001: 167) 参照.
- (5) Goethe Institut — Profile Deutsch <http://www.goethe.de/lhr/prj/prd/deindex.htm>
- (6) Vanderwal (2014) 参照.
- (7) Python Programming Language. <http://www.python.org/> オブジェクト指向のプログラミング言語で、豊富なライブラリが魅力である。
- (8) MongoDB. <http://www.mongodb.org/> NoSQLと呼ばれるタイプのデータベース管理システム。JavaScriptにおけるデータ記法であるJSONを拡張した形式でデータを保持し、データ間い合わせにはJavascriptを使用する。
- (9) 検索の利便性を考慮して、日本語、ドイツ語キーワードではレマ形を使っている。そのため、ここではドイツ語で文中の語形とことなる語形がキーワードとして挙がっている。
- (10) これら进行操作するためのライブラリは、Githubを使って管理している。Https Clone Url: <https://github.com/abekaz08g/atmethod.git> を参照されたし。

【巻末資料1】 ドイツ語を使って何がしたいのか (実際のアンケート結果を修正)

- ・ドイツ留学
- ・ドイツ旅行
- ・本場のドイツ語を聞き取ってみたい。
- ・実際に活用したい
- ・書きたいことを書けるようになりたい。
- ・簡単なドイツ語はスラスラ読めるようになりたい。

- ・グリム童話や歴史書、レシピ本などドイツ語で書かれた書籍を読みたい。
- ・映画を字幕なしで理解できるようになりたい。
- ・簡単な会話でも構わないからドイツ語圏の人と話せるようになりたい。
- ・ドイツの歴史を学びたい。
- ・ドイツ語と共にドイツの文化なども知りたい！
- ・ドイツ人と友だちになりたい
- ・周りの人に教えてあげたい
- ・ドイツ語の検定に受かる。
- ・簡単なあいさつができるようになりたい。
- ・ドイツのことを調べてドイツ語で発表する。
- ・ドイツ語の楽曲を理解したり歌えるようになりたい。
- ・ドイツ人のホームステイ受け入れ。
- ・将来ドイツ語圏の国に旅行することがあったらドイツ語で何か注文してみたい。
- ・仕事で使いたい

【巻末資料2】ドイツ語を使って何ができるようになったのか
〈話す〉

「言う・尋ねる」

- ・ {自分の／人の} 名前が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 出身が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 住所が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 趣味が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 年齢が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 好きな食べ物が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 好きな飲み物が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 家族構成が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 職業が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 持ち物が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 調子が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} いつ何を食べるかが {言える／尋ねられる}
- ・ {自分の／人の} 起床時間が {言える／尋ねられる}
- ・ {自分が／人が} パン派かご飯派かが {言える／尋ねられる}
- ・ 物についての感想が {言える／尋ねられる}
- ・ 日付が {言える／尋ねられる}
- ・ 時間が {言える／尋ねられる}
- ・ いつするのか {言える／尋ねられる}
- ・ 物が何かを {言える／尋ねられる}

・物の名前 {日本語／ドイツ語} どう言うか {言える／尋ねられる}

「説明する」

- ・道案内ができる
- ・人の紹介ができる

「やりとり」

- ・断る (知りません)
- ・断る (忘れました)
- ・断る (答えたくない)

「決まり文句」

- ・メリークリスマス
- ・あいさつ

「特殊な言語記号」

- ・数字
- ・アルファベット

〈読む〉

- ・店名などに関して英語とドイツ語が区別できるようになった。
- ・ドイツ語でレシピが読める

〈聞く〉

- ・ビデオでドイツ語がところどころ聞き取れる

〈ドイツ文化〉

- ・ドイツ語の曲を何曲か知った